

## 令和元年度 第2回社会教育委員会議概要

- 1 日 時：令和元年8月21日（水）14：00～16：30
- 2 会 場：小田原市生涯学習センター本館（けやき） 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、有賀委員、齊藤委員、田中委員、深野委員、眞壁委員、益田委員
- 4 職員等：安藤文化部長、石川文化部副部長、樋口生涯学習課長、湯浅生涯学習副課長、八田生涯学習係長、生涯学習課佐久間主査、奥村小田原市生涯学習推進員の会理事長（事務局）相澤主査

5 傍聴者：2名

### 6 概 要

#### 1 文化部長挨拶

安藤文化部長が挨拶をした。

- 2 協議事項（1）令和元年度神奈川県社会教育委員連絡協議会地区研究会について開催要項及び人権講話及び基調講演について、資料1に沿って生涯学習課長から説明をした。

タイムスケジュールについて、資料2に沿って相澤主査から説明をした。

**【田中委員】** 前回、サブテーマを付けた方がよいのではという意見があったが、事例発表と重なる部分もあるので、事務局で検討して、事例発表の部分でということであった。私はサブテーマがある方がよいと思ったので、2つ案を考えてきた。一つは「生涯学習 子ども 大人の学びを通じて」。もう一つは、例えば「小田原ならではの地域資源を活かして」などを付けてもよいのかなと考えてきた。事務局で検討してサブテーマはなしというところだが、もし会議の中で必要ということであれば、この二つはどうかと思い意見を言わせていただいた。

**【木村議長】** 事務局いかがか。

**【生涯学習課長】** おっしゃる通りと感じた。当初執行部としては、基調講演がベースとなって、これがそもそものサブタイトルになってくのではないかという考えがあったのだが、表現が固い。私の中でじっくりくるのは後者である。所管課の立場としては、小田原の売りは地域資源だと考えている。大人の学び、子どもの学びはタイトルで入ってくるので、地域資源というキーワードは活かしたい。但しメインタイトルで小田原と入れると、「小田原」が二つ重なってしまう。メインタイトルを「学びがつなぐまちづくり」サブタイトルを「小田原ならではの地域資源を活かして」とするのはいかがか。皆さんのご意見を伺いたい。

**【木村議長】** これに対してご意見はあるか。

**【深野委員】** 今の案でよいと思う。メインタイトルが「学びがつなぐ小田原のまちづくり」というと、事例発表みたいになってしまう。ここでは「学びがつなぐまちづく

り」と不特定多数にした方がよいと思う。普遍的であるという意味では、メインタイトでは小田原をとった方がよい。サブタイトルで小田原の地域資源を活かす、小田原を事例にしてまちづくりの話をするのだとした方がすっきりする。私もそれがよいと思う。

【益田委員】

【木村議長】

【深野委員】

【生涯学習課長】

ではサブタイトルをつけるということで、よろしく願います。

通常地区研究会では、最後に質疑応答の時間がある。15時50分に終わるとなると、16時まで質疑応答の時間を取った方がよいのではと思うがいかがか。

前回の会議で、地区研究会の目的は研究・協議・情報交換とうたっている中で、質疑応答がないとその目的が充足できないのではないかという意見があった。齊藤委員の事例発表では行政が行っているおだわら市民学校について取り上げていただくため、ここの質問に対して誰が答えるのかということがある。より目的に対しての充実度を増すために、会場の後方に放課後子ども教室の事例や、おだわら市民学校のパネル展示ブースを設けようと思っている。そのブースにはおだわら市民学校の受講生にも来ていただき、個別のブースの中でより深い質疑応答をできる方が実質的であると考え、登壇しての全体の質疑応答ではなく、このように組み合わせていただいた。

【木村議長】

私も事前に説明を受けた。他の市町の地区研究会に行くと、会場に観光的なパンフレットがおいてあることが多いが、小田原の場合はそうではなく、パネル展示のような形で、その場でお話しできた方がよいのではと思う。

質疑応答すると発表者全員が登壇してその場にいないといけない。質問が出た時に当たった人が説明しなければならないが、どんな質問が出て来るかわからないし、一つ一つやっているのととても時間が足りない。なので、パネル展示でどうかと考えた。

【深野委員】

とはいえ、一つのセレモニーとして、質疑応答という時間がないと最後が締まらないなという気がする。他の地区研究会の最後はだいたい委員のみなさんがずらっと舞台に並んで質疑に答えている。他のところを真似する必要はないが、事例発表が終わってすぐ閉会の言葉というのはどうなのかとひっかかる。ブースがあるのはもちろんいいと思うが、それと質疑応答の時間を設ける話は別のものだという気がする。ブースだと、笹井副議長、齊藤委員の話に対する直接的な質問ができない。

【生涯学習課長】

会場の後ろにブースを設けようと考えているが、閉会の言葉の中で、後ろにブースを用意してあるので、個別に質問がある場合はそこで受けるが、この場でどうしても質問したい方については、この場で一旦受けるということもありかと思う。

【齊藤委員】

学会でよくあるが、最後にまとまりに向かっているところであるのに、的外れな質問で長話をされる方がいる。そうすると、「小田原」について盛り上がってきたのに、その主旨と外れたところ、例えば自分のまちの悩みをずっと語られ

ると、地区研究会について最後に心に残るのがそのことになってしまう。みんな自分たちのまちの悩みを語りたい。もし可能ならば、笹井副議長・有賀委員・私が担当するところで質問用紙を準備しておき、その時質問がある人ということで、2・3預かり、即席回答にはなるが、その内容に対して笹井委員に代表して話してもらった方がまとまりはある。最後が変な感じで終わるというのはよくあるパターン。最後の質問というところは難しい。最後の切り方も難しい。それを避けるためには質問用紙を回収し、それに対して笹井委員が代表して答えるというのが一番スマートだと思うがいかがか。

【深野委員】 確かに、質問ではなく自分の考えを延々と述べる方もいる。

【齊藤委員】 最後の段階でそうなる可能性は意外と高い。

【深野委員】 確かにそのリスクはある。だが、質問用紙をまとめる、ぱっと見るだけにしても、そのタイミングが難しい。

【齊藤委員】 例えば事例発表中に質問用紙を回収し、笹井委員が代表してそれに回答する。

【生涯学習課長】 例えば受付で資料が配られる段階で質問用紙も配り、自分が疑問に思うことを書いてもらい、アトラクションの段階で集め、それを見ながら笹井委員が即興でその質問への回答を盛りこんだ講演をやるというイメージか。

【齊藤委員】 それはできると思う。

【生涯学習課長】 例えば放課後子ども教室についてであれば、有賀委員が質問に対する回答を意識しながら、それを盛り込んだ説明に切り替えるというイメージか。

【齊藤委員】 そうである。社会教育委員はみな似たような悩みを持っていると思う。小田原が事例だけれども、その悩みを共有していきましょうという言葉が欲しいのだと思う。

【深野委員】 他の地区研究会では、閉会の言葉でまとめ的なことをいう人もいる。そこの締めをどうするかという悩みがあり、質疑があった方が締めやすいなと思ったのだが、齊藤委員が言うように、質疑があるとばらばらになってまとめ難しくなってしまうというのもあるので、質疑はなしでよいと思う。

【生涯学習課長】 閉会の言葉では、後ろのブースの紹介をしていただくということでしょうか。

【深野委員】 それがよいと思う。

【生涯学習課長】 齊藤委員の案についてはいかがか。質問用紙を集めるタイミングが、アトラクションの後の休憩時に集めても笹井副議長はすでに講演のスタンバイに入ってしまったので、集めるタイミングが難しい。

【齊藤委員】 講演中に気が付いたことを書いてもらう。自分のまちに照らし合わせて質問を書きたい人がいるはず。そのようなことに対しどうしたらよいか、笹井委員にまとめてもらえばよいのでは。笹井委員は慣れているので大丈夫だと思う。

【深野委員】 研究会の最後に質問への回答コーナーを作るイメージか。

【齊藤委員】 そうではなく、講演中に誰かがこれが質問ですと委員に渡して、こういう質問があったがこれについてはこうですと一言あれば、質問者も、受け止めてくれ

たのだと思うので、それは好感度が高くなる。

- 【深野委員】 講演慣れしている齊藤委員はできるかもしれないが。
- 【齊藤委員】 笹井委員もすぐできると思う。
- 【生涯学習課長】 受付で配布した質問用紙をいつ回収するかという問題だけかと思う。
- 【益田委員】 開催要項を周知するときに、もしご質問があれば事前にお知らせくださいという紙を一枚つけて出すという手もある。ひと手間かかるが、そこまでして聞きたいという人があれば。そういう手もある。
- 【齊藤委員】 例えば笹井委員が国の政策を作っていた方だと聞いたとたんに、国の方針について質問したくなる人もいる。
- 【生涯学習課長】 当日、発表のスライド資料を見ながら質問を考えるのだと思う。当日受付をして時間があるときに目を通してもらい、思いついたことを書いてもらう。どのタイミングで回収し、先生方にお渡しするかということだけが問題。ただこれは要項とは関係のない部分である。これは当日まで考える時間があるので、預からせていただきたい。笹井委員にも確認しないとイケない。
- 【齊藤委員】 途中で質問用紙をもらったとしても、笹井委員は15時10分まで時間があるので大丈夫だと思う。
- 【木村議長】 ではそのような話になったということで、笹井委員に確認をお願いします。
- 【生涯学習課長】 運営の中で検討したいと思う。
- 【木村議長】 要項についてその他よろしいか。
- 【有賀委員】 子どもの学びのテーマであるが、齊藤委員のテーマに揃える形で、「地域資源を活かした放課後子ども教室の取組」にしていだければと思う。また、おだわら市民学校の生徒がブースで対応されるとのことだった。子ども教室に関して、関係者やスタッフに声掛けて、個別質問の時間に来ていただくことは可能であるが、必要はあるか。
- 【生涯学習課長】 ブースの規模にもよるが、おだわら市民学校とのバランスや、有賀委員自身がいろいろな人と対応しなければならないということもあるので、応援がいた方がスムーズではある。
- 【有賀委員】 声をかければ何人か来てくれるかもしれない。今回事例発表で取り上げる歴史カルタも展示する。カルタの紹介に慣れている方にも声をかければ来てくれると思う。
- 【生涯学習課長】 ぜひそこはお願いしたい。
- 【深野委員】 ブースの設置やパネルの作成はおだわら市民学校の生徒がするのか。
- 【生涯学習課長】 パネルは既存のものがすでにあるので、こちらで前日のうちに設置する。
- 【木村議長】 有賀委員の部分については、修正をお願いします。資料1については、今の内容で神奈川県に提出するというところでよろしいか。

(異議なし)

- 【木村議長】 資料2のタイムスケジュール案についてはいかがか。
- 【真壁委員】 この日は仕事の予定が入っている。調整すれば大丈夫かもしれないが、今のところ不透明なのだが。
- 【生涯学習課長】 事前に分かっていたらやりくりはできる部分である。
- 【木村議長】 みんなで受付を手伝える。
- 【真壁委員】 調整して、出られるようであればやる。申し訳ない。
- 【深野委員】 登壇する時以外は、私が記録係をできる。
- 【木村議長】 では記録係は深野委員にお願いする。タイムスケジュール案についてもこの通りとさせていただきます。

(異議なし)

- 【木村議長】 それでは齊藤委員と有賀委員に簡単に事例発表についてお話しいただきたい。  
(齊藤委員、有賀委員説明)

- 【木村議長】 では次に、キャンパスおだわらの点検評価を議題としたい。

協議事項(2) キャンパスおだわら事業点検評価について  
資料3-1から3-3に沿って生涯学習係長から説明をした。

- 【木村議長】 キャンパスおだわら運営委員会の委員長として、実際にキャンパスおだわらの運営の評価を行ってきた齊藤委員にご意見をお伺いしたい。
- 【齊藤委員】 特色ある事業の一つとしてキャンパスおだわらがある。2011年からやっておりずいぶん長い間市民が事務局を担ってきたという意味で、生涯学習事業の多様化にこたえられたということと、もう一つそれぞれの担当課から出てきた生涯学習事業を束ねて情報発信する機能がここにできたということは特色としてあげられる。個人的な感想としては、長く市民が中心になって生涯学習事業を担ってきたということはすごいことだと思う。また、生涯学習事業の講座の特色として一つは、大人だけでなく子どもに対しても生涯学習事業を展開しているということである。子どもが参加できる講座にこだわっており、子ども講座としては21.7%、およそ1/5の講座が子どもに向けた講座であるということがあげられると思う。もう一つこだわってきたのは小田原ならではの地域資源を取り入れた講座が10.4%あるということ、小田原の地域資源を取り入れた講座を意図的に導入してきたということがあげられる。未達成と書かれている内容としては、学習成果をまちづくりに活かす点検評価が必要であるという話が先ほどあった。これに関してはこの講座にまちの人材育成を担っていく講座まで

なかなか仕立てられないという実態もあったかと思う。それが移管して切り取られた形で、おだわら市民学校が立ち上がったかと思っている。全体として、みなさんに見ていただきたい観点がある。一つ目に、評価に上がっていない事項であるが、キャンパスおだわら事業の理念やビジョンがどのくらい小田原市内で浸透しているのかということがあげられる。二つ目は、これも評価と違うが、運営の在り方というところである。講座の情報を束ねる作業や人材バンクを実施する部分に特化して市民が担うということで、長年小田原市生涯学習推進員の会の方が担ってきたが、実際にみなさんの年齢が高くなってきている。持続可能な地域社会を支える、持続可能な生涯学習を支えるために、新しい人がどんどんキャンパスおだわらの事務局に入ってきているかという観点で、現在の運営の在り方が今後もこの形でよいかということも改めて考える時に来ている。三つ目が、そもそも論であるが、この事業の評価の柱がこれでよいのかということである。情報発信だとか学習相談というこの柱自体が元々の社会教育の柱でもあったが、情報発信の在り方、学習相談の在り方がこの10年の間に変わってきている。未達成と評価されてしまった情報発信、学習相談について、普遍的な形で実施させているが、時代とともに変わっていく必要がある。みなさんから現代的な現状に合ったコメントがあるとよいと思う。いろいろな事業の情報を束ねて発信していても、市民に届かなければ意味がない。学習相談も来た人の相談に乗る待ち体制。だが相談に来るのも勇気がいること。おだわら市民学校ができたことで今後起こってくるのが、学習の仕方を相談したいというよりもむしろ活動の相談をしたいということである。学んだことを活かしたいという相談があった時に、生涯学習課だけでやっていてよいのかという話もあるし、この柱となる情報発信等の今後の在り方についてもみなさんにぜひご意見をいただきたい。さらに、柱の最後である人材バンクについては、有賀委員が一生懸命人材バンクの在り方、活用の仕方に尽力してくださった部分もあるのだが、実際どうだったのか。数からみてどうなのか。人の入れ替わりがどうだったのか。数としては増えているが、実態としてどうだったのかということ現場としてもお聞きしたい。そこは有賀委員にお願いしたい。それぞれの数だけで見ないで、質的な部分、理念やビジョン、運営の在り方、時代に合った生涯学習の在り方について、一市民としてコメントしていただきたいと思う。

【木村議長】

みなさんからご意見を伺うにあたり、話を整理するために資料 3-1「3 運営体系」にあるとおり、学習相談、学習情報、学習相談、人材バンクという順に一つ一つやりたい。まずは学習講座について議題とする。みなさんの卓上に、本日欠席された高須委員のご意見を書いた点検評価表があるので、後でお読みいただければと思う。

【益田委員】

質問であるが、資料 3-2 で、「②市民ニーズに対応した講座が提供されている」という項目が概ね達成になっている。平成 30 年度では講座数は上がっている

が、前年に比べ講座受講者数が減っている。これは理由を把握しているか。

【生涯学習係長】

その理由は把握していない。

【益田委員】

初めてキャンパスおだわらについて詳しく資料を読んだ。一市民としてはキャンパスおだわらに関わってきたが、わからないことがありすぎて意見にまとまらなかった。そもそも情報収集をどうしているのかもわからない。2,054件集めるのも大変だと思うが、それは来たものを集めているのか、こちらから呼びかけて集めているのかというところからわからない。

【生涯学習係長】

行政分については生涯学習課が集めて、小田原市生涯学習推進員の会に提供している。

【佐久間主査】

民間情報については、隔月発行のキャンパスおだわら情報誌に掲載された情報を集めて、実施したものについては、何人集まったのかを追跡調査し、その数を集計したものを表に載せている。後は推進員の会でも、人材バンク事業でキャンパス講師の方がご自身で出向いて講座を実施した分についての情報を毎月いただくようにしており、その人数と件数をカウントしている。行政分については、先ほど説明したとおり他課も含め実施した情報を集めてカウントしている。

【益田委員】

集めるのは大変だなと思う。情報の取集漏れはあるのか。

【生涯学習係長】

行政分は別として、企業等については完全に収集できているかどうかはわからない。益田委員がキャンパスおだわらについてわからないことがありすぎるとおっしゃっていたが、キャンパスおだわら自身の認知度を上げていかないといけない。せっかく集めた情報を活かさないといけない。情報の発信はしているが、それが欲しい人に届いているかを意識しなければならない。

【奥村理事長】

実際には、この表で示している講座数の3倍から5倍の講座が展開されている。例えば地区公民館での講座などが完全には把握できていないという実態がある。それを広げる努力はしているが、なかなか集めにくいという状況がある。残念ながら市全体で開催されている講座から見ると、収集できているのはそのうちの1/3から1/4というのが実態である。さらにどうやってというのは難しい。今はうまい知恵がない状態。キャンパス講座については認定制度があり、その土俵に乗るのがそのくらいの割合でしかかないという実態がある。

【益田委員】

講座数が多い分野と少ない分野の差があるのが現状と書いてあったので、数が少ない分野はその土俵に乗ってないだけなのかなと思った。そこをどうバランスを取ったらいいのかと思う。

【佐久間主査】

益田委員がおっしゃるとおり、講座数が少ないことについて、その分野の講座を定期的に行っている団体の情報を把握しきれていないということも、原因として一つ考えられると思う。あるいは、本当にその分野で打たれている講座が少ないという考え方もある。情報収集と、小田原の中でその分野の講座を実施してもらうためにこちらで何ができるかという二方面で見ていただく必要があ

ると考えている。

**【木村議長】** 講座情報の収集と発信は難しいことだと思う。先ほども話が出たが、地区公民館が129館ある中で、講座をやっているところとやっていないところで温度差がある。そこをどうやっていくのか。地域は地域なりに一生懸命講座をやっているところもある。そういうところに、うまくキャンパス講師に来てもらい、いろいろなジャンルについてやっていくといいのではと思う。講座の場所の提供ということを考えると、小田原のなかでは、浸透はしている。ただそういうことに興味のある人は来るが、それが市民全体に浸透しているかということ、そこには疑問が残る。そこをこれからどうしていくのかということ。

**【深野委員】** 本日、お手元に私が講師をするキャンパスおだわら公開講座のチラシを配らせてもらった。講師としては2回目の講座である。公募型市民企画講座をやろうとした時に、いつも誰が対象なのかよくわからない。例えば報徳博物館の報徳ゼミという講座に時々参加するのだが、そこは二宮尊徳についてよく知っている人が集まる会なので、みんな読んでいる資料のレベルが高い。そういう人たちを対象にするのか、それとも議長がおっしゃるように全然関心のない人に関心を持ってもらい、小田原の良さを知ってもらおうというところを狙っていくのか。話す側としてはそこが非常に難しい。キャンパスおだわら事業は誰を対象に実施しているのか。NPOが集めている講座情報が、小田原市全体の活動の1/4くらいということだが、キャンパスおだわらが全部をカバーしなくてもいいのではと思う。まちじゅうキャンパスと言ってしまうからそうなっているが、いちNPO法人の人たちが集めるのは無理ではないか。そんな無理をしなくてもよいのではないか。もちろんできればそれに越したことはないのだが。そうだとすると、なんらかの専門性が高い、年齢層の高い低いといったマトリックスの中で、どの辺をキャンパスおだわらが狙っているのか。市民の底上げを狙っているのか、小田原の文化や郷土に関心の高い人達のブラッシュアップを狙うのかで、講座の内容が全然違ってくる。そのことについて、もう少し講座そのものの整理整頓が必要である。講座をたくさんやればいいというものではない。

**【奥村理事長】** おっしゃるとおり、レベルを決めた形での対応が取れていないのが実態である。キャンパスおだわらはまちじゅうをキャンパスとして展開して、ボトムを持ち上げていこうという対応を取っている。レベルがどうという以前に、受講者は講師の顔やお名前を見ながら参加をされるケースがどうしても出てくる。こちらでレベルを決めたとしても、受講され方は講師を見て判断される。レベルを明確に規定して展開したとしても、今そのレベルで、講座を開く前提である受講者集めができるかということ非常に難しい。そのような課題を持っている。対象としてはまちじゅうキャンパスであるから、それを狙いにした講座を打っている。ただしそれを狙いにしたとなると、いろいろなジャンルがある。後から



配られた資料にジャンル別の講座状況も展開しているが、だからといってそれからどう絞りこみをするのかということが難しい。むしろいろいろな講座をずらっと並べて、参加される方に評価をいただきながら進めていくのが今の実態である。

**【深野委員】** 前回講座を実施したときに、推進員の会でアンケート結果をしっかりと整理したものを送っていただき、講師としては非常に参考になった。個別の講座毎のアンケートも講座構成の見直しに役に立つ。

**【有賀委員】** 学習の成果がまちづくりに活かされているという項目が未達成で、適当な指標がない。深野委員が言われたように、アンケートをもっと活用できないかと思う。先日認知症サポーター養成講座に参加したが、そのアンケートに「今後の情報が必要か」という項目があった。自分はぜひ情報を欲しいと思い、丸をした。そういうところも一つの目安になる。アンケートは大事である。

**【木村議長】** 小田原市全部がキャンパスだということを考えると、最終的には地域しかない。地域ががんばらないといけない。いくら一生懸命講座を考えて事業をやっても、興味がある人はくるかもしれないが、小田原市全体がキャンパスだというならば、地域を巻き込むのが一番手っ取り早いと思うがいかがか。

**【奥村理事長】** まさにそのとおりである。平成 23 年からキャパスおだわら事業に関わっているが、状況は相当変わってきており、同じことが継続できるとは思っていない。生涯学習の拠点も絞られてきている。今後も学校が拠点、地区公民館が生涯学習の拠点となってきているので、そことどうつながりを持っていくのか考えることが必要である。それに向けて、例えば自分時間手帖などがどう展開できているかを考えた時に、少なくとも地区公民館のみなさんに当たっていかないといけないという考えもある。その辺を行政と民間が一体となって上手に進めていかないといけないという気はしている。

**【木村議長】** 小田原市内 26 の連合がまちづくり委員会をやっている。いろいろなことをやっても、興味がある人はくる。私は、講座受講人数の多い少ないはあまり考えていない。人数が少ないからだめなのか。そうではない。指標としては、そういうものしか出せないから出していると思うが、では人数が少なれば切っていくのかという話になるので、私は人数には重きを置いていない。講座に来てくれる人がいれば、それはそれでよいと思っている。キャンパスおだわらも 2011 年にはじめて 10 年たつ。徐々にでもいいと思うので、これからも事業を続けて行って欲しい。市民も楽しみにしている。

**【田中委員】** キャンパスおだわらの目指す姿のうち、小田原市の課題に対応した講座が提供されているかについては、小田原市総合計画の各政策分野において多岐にわたる講座が提供されていると思った。次に、市民ニーズに対応した講座が提供されているかについては、平成 30 年度実績のレビューにおいて「子どもが参加できる講座は全体の 21.7% 存在し、幅広く対応していると思われる」との見解で

あるが、未来を担う子どもの育成との観点から、25%くらいが妥当であると判断する。ただ、講座を開設したから、子どもたちが実際にそれらの講座に食いついているかというところ、なかなかそういかないという実態も聞いているので、難しいかと思う。小田原の人材、歴史、文化、産業、自然環境などさまざまな資源を取り入れた講座が開催されているかについては、小田原の地域資源を取り入れた講座についてほぼ指標を達成していると思う。さまざまな団体により講座が開催されているかについては、講座開催主催者数は指標達成率が80%を超えているので、一定の実績を確保していると思う。さまざまな団体が連携して講座が開催されているかについても、概ね開催できていると思う。学習の成果がまちづくりに活かされているかについては、学習の成果について図る指標を早急に作成すべきである。受講者に対しての追跡調査や講座終了後の意見集約と、今後どのようにまちづくりに活かしたいかを確認すべきである。そんなことを思わずに講座に参加するかともいる。まちづくりは自分にとって関係ないと思われるかともいるので、そこが連動するかどうか。こちらとしては連動させたいと思っているのだろうが、そうした意向が通じていけばよいと思う。

【生涯学習課長】

今の項目について整理させていただく。主要なご意見としては、木村議長が言われたような、キャンパスおだわらの理念を展開するためには、地域を巻き込みながら地区公民館を活用し展開していく必要があるということ。それから深野委員から言われたとおり、だれが対象であるのか、だれでもどこでもいつているのでみんなが対象ではあるが、そうは言っても全くの素人と歴史研究家では、受ける側としても不安があるので、講座の中の整理として見える化をしたほうがよいということ。それから田中委員のご意見にも共通するが、指標がないところ、まちづくりに活かされているかというところで、有賀委員からもアンケートということがあった。そこについては、何を目的にというのはそれぞれある。単に学びたいというもの、仲間を作りたい、行くことが目的、それぞれあるので、それぞれの講座の目的を踏まえながら、講座がその目的をちゃんと活かしているのかということ視点をしたアンケートが必要であるということで整理し、受け止めたいと思う。

【木村議長】

学習情報に行きたいと思う。キャンパスおだわら情報誌や自分時間手帖を発行したりしているが、それらを市民全員に渡すことはおそらく無理だが、ただ発信しているからいいのかという問題もある。いつも話が出るのだが、最近は見ない、紙媒体は読まない。今251の自治会長のところに1冊ずつ自分時間手帖が配布されているはずだが、それでもそれを利用しようという話は出てこない。もらったもらいっぱなしである。話はずれるが、小田原市がハザードマップなどを一生懸命作ってくれるのだが、それをもらう我々住民側の方がもらったもらいっぱなしで、筆筒の上に置いていて、そのままということが多い。紙

ベースで配ったからそれでいいのかということも不思議に思っている。旦那さんがいないときに回覧板が回ってきて、奥さんは見て次に回してしまうと、旦那さんは何もわからない。そういう話をたくさん聞く。私は紙ベースで配ることについては疑問に思う。

**【眞壁委員】** 今キャンパスおだわらのホームページをスマートフォンで見ているが、スマートフォン対応していない。字が小さく見にくい。50代以下の人はだいたい紙の媒体を見ない。皆ネットから情報を得るので、スマートフォン対応をしっかりとしたほうが事業について浸透するのではないか。

**【齊藤委員】** 前から思っていたのだが、キャンパスおだわらのホームページは非常に充実している。全ての情報が載っているのだから、細かすぎて、字も小さくて見えない。情報が多すぎる。これは予算を取って作るしかない。これを生涯学習推進員の会の皆さんがやるのはほぼ不可能である。やるのであればお金を使ってやるべき。そうすれば、中年層や親世代、仕事を持ちながらの人など、いままで情報を受け取っていた層以外の人が出てくる。講座数が多すぎると思うので、初心者向けとか父親向けとか、ターゲットを絞って、いくつかを特色ある事業として紹介するのがいいのではないか。これはNPO法人がやることではないと思っている。

**【木村議長】** 紙媒体が悪いといっているわけではないが、もったいない。作って渡せばそれを利用してくれるかといえば、なかなか難しい。それであれば、みなさんが言うようにスマートフォンでも見られるように、いろいろなジャンルに分けながらやるのも一つ手ではないか。

**【奥村理事長】** スマートフォン対応は完全には出来ていないが、一応見ることはできる。ただし紙との比較においては、我々の主催した講座のアンケートによると、キャンパスおだわら情報紙を見て講座に参加した人が70%強いる実績もあり、今の時点では、紙での情報が必要だという意見が非常に多い。ホームページの見やすさという点では、情報が非常に密なので対応ができていないのだが、そこに対する対応もしながら、紙も残していこうと考えている。意外と紙ベースでのご意見が強くある。紙ベースのコストパフォーマンスが非常に悪ければ話は別だが、この範囲くらいでは、非常に期待されているという認識である。

**【木村議長】** 紙ベースがいけないということではない。紙ベースとネット両方でやっていくのがよい。

**【有賀委員】** 情報誌は今年度から2ヶ月に1回になった。内容的にも凝縮されて見やすく、いろいろなところに置いてある。すぐに手に取れるというのは重要である。

**【益田委員】** 仕事で「こんにちは赤ちゃん訪問員」をやっている。10年前この仕事を始めたころは情報誌を配ってなかったのだが、自分が情報誌を知って、子どもの情報が出ているので、何年か前から赤ちゃんがいる世帯に配らせてもらうようにした。まずはお母さんたちに対して、情報誌を見たことあるかということから

始めるのだが、見たことあるお母さんはほぼゼロである。でもそこで私たちが持って行って、子どもの講座も載っているよと紙を見せながら口で説明すると、ああそういうことが載っているのだと初めてわかる。紙媒体で配るというもの一つ手だと思う。私が配っているということを行政の人も知らないと思う。周知していくということがすごく大切。マロニエや支援センターに置いてあるから、これからは気になったら見てくださいと言っている。どれだけのお母さんに響いているかわからないが、そういう地道は努力をあちこちでしていくのは大事だと思っている。

**【奥村理事長】** 自分時間手帖については、以前は5千部配っていたが、見たことがないという人がたくさんいた。関心を持っている人以外は見る機会が少ないのだが、絶対量として、人口に対して5千部は少ない。5千部をどう広げようかとした時に、従来の5千部に加え、新たに小田原に転入されたかたに無条件にお配りするというので、3千部追加し、現段階では計8千部配っている。ただその活用がどこまで進んでいるかは、今ちょうどアンケートをとっている段階である。これから評価をしなければならないが、絶対数を増やすという形も必要である。ただし当然費用が発生するのでその点も考えないといけない。情報誌はこれで6年目になるが、やっと定着化したのでさらに広げていく。

**【生涯学習課長】** この事項について整理させていただく。紙ベースでの学習情報については、情報が欲しい人のところに確かに届いているかが問題である。例えば、公民館長、子育て世代、転入者など、必要なところに必要な形で届いているのかということが大事である。そのような視点での見直しの中で、併せて必要であれば部数を増刷もする。またネット環境、情報整理、検索のしやすさ、スマートフォン対応も含めた環境整備について検討をするようにというご意見があった。

**【木村議長】** 次に学習相談に入りたい。

**【有賀委員】** 資料3-2の学習相談について、事業の設定指標・根拠資料等という欄に書いてある再掲とはどういう意味か。

**【生涯学習係長】** 事業と対応するキャンパスおだわらの目指す姿が重複しており、すでに情報を出させていただいているという意味である。例えば再掲⑥というのは、学習講座の収集・提供事業に対する目指す姿の⑥としてすでに記載されているということである。

**【齊藤委員】** 学習相談の件数は、今そんなにあるのか。こういう学習をしたいがどうしたらよいかという相談業務はもともとの生涯学習の伝統的な事業の一つであったが、役割が変わってきている。行政としては学んだことを活かすことに力を入れたい。学習相談の役割が学習したことを活かすために、誰がどのような支援をできるのかということを確認していけばよいのではないか。ここはコーディネーター業務が必要である。この人はこういう講座に向いているから、今度はこういう講座に参加してみないという後押しが必要。一人一人をフォローするのは

大変なのだが、ここでキーマンを探せる。おだわら市民学校とリンクしながら、待ち体制ではなく、しかける体制で役割をもう少し強化していけば学習相談業務がより発展していくのかと思う。

【木村議長】 学習相談は、生徒が窓口まで来て相談するのか、今までおだわら市民学校で学んだ人がこの中で相談するのか。一般の人が来るのか。

【生涯学習係長】 学習相談については、けやきに直接お越しいただく。電話でもお受けするが、頻繁に掛かってくるわけではなく、一日1件ほど。自分が受けている限りでは、こういう活動をしたいがどこかでやっていないかという講座情報の案内が多いという印象である。そういう意味では齊藤委員がおっしゃるように待ちの状況ではある。人によっては学習相談窓口がけやきにあるということさえ知らないという状況。そういうところはもう少しPRが必要だと思う。実際の問い合わせとしては、こういう活動をしたいがどこか近くでやっていないかという内容に対して、自分時間手帖を使って紹介している。問い合わせ自体が少なくなっているのは確かである。

【木村議長】 マロニエでは学習相談を行っていないのか。

【生涯学習係長】 マロニエに学びの相談室を設置していたが、相談件数が減っていることもあり、平成30年度で閉鎖をした。

【木村議長】 そのような窓口を残しながらいろいろ考えていったらよいのでは。

【生涯学習課長】 相談件数が減っている。問い合わせが来るのが一日1件程度で、ほとんどのケースは60歳以上の方がこういうことをしたいがどこでやっているかという質問に対して、自分時間手帖を見ながら紹介している。一方で、自分時間手帖の浸透率という意味では70%以上の方がこれらの冊子を見て講座やサークルに参加をしているので、相談件数が減っているのは必然ではないかと思う。評価としては未達成となっているが、この二つが関連しているのではないかと思っている。齊藤委員が言われるように、学習相談の受け皿は用意しておかなければならないが、ネットの環境や情報誌が届いていれば、学習相談の数は減少してくるのが、あるべき姿だと思う。学んだ成果をどう生かすかという視点に軸足を置いてご指摘いただけるとありがたい。

【木村議長】 いままでのものは残しつつ、という形でやっていった方がよい。

【田中委員】 学習相談について、PRが足らないと反省するよりも、それ自体ニーズがあるのかが重要である。今の話だと情報提供についての問い合わせはあるが、学習そのものの相談をというところから様変わりしてきている。例えば学校では定期テストの一週間くらい前に学習相談をやる。それはある程度範囲が決まっており、それに対する相談である。このような幅広い中での学習相談というのは現実的なのかどうか考えたときに、あまり反省すべきではないのかなと思った。

【奥村理事長】 我々も2年前まで学習相談に係わっており、情報提供のケースが大半であった。コーディネーターが必要な案件は一日1件ないくらいというのが実態であった。

情報発信が充実してくると学習相談件数が減ってくるのかなという評価もしているところである。ただし、直接顔を合わせながら、具体的なコーディネート、つまり講座をどう開くのかなど、本来の相談業務に関わるような状況になっていけばいいのではと思っている。そこは大いに見直しをする必要があるという認識でいる。

- 【木村議長】 その辺を行政と相談しながらやっていただけたらと思う。
- 【生涯学習課長】 学習相談について整理する。齊藤委員からはまちづくりに活かすためのコーディネート、今の意見でいえば、講座を開く人がどう開くかというコーディネート、それらを踏まえながら学習相談の機能について見直しを図ることというご意見をいただいた。
- 【木村議長】 次に人材バンクにうつりたい。
- 【有賀委員】 実績を見ると人数は増えているし、講座数も増えている。ここでいう講座とはキャンパス講師の自主講座の開催数だと思うが、同じ人が何度も開いているようにも捉えられる。
- 【奥村理事長】 そのとおりである。後からお配りした資料の中にあるが、キャンパス講師として登録した後、一般の市民からお声がかかれば正式な活動が対応可能な仕組みになっているので、それを利用して活動の機会を増やしていただければと考えている。同じ方が何回も活動しているケースもある。
- 【有賀委員】 放課後子ども教室等で参考にしているが、いつもお願いするキャンパス講師の方は決まっている。幅広く皆さんが活動しているのかということがこのデータではわからない。できればいろいろな人にいろいろな場所で活動していただければと思う。
- 【木村議長】 依頼が偏ってしまう。一人の講師にお願いするとずっとその人になってしまう。
- 【奥村理事長】 依頼する人も、実績がある人に特定して依頼をするケースが一番多い。ただキャンパス講師の数について、今回130名前後になっている。年間20名くらい新しい人に代わっている。前々年が19名、昨年24名という形でキャンパス講師も新しく変わっていった。発表の場を提供していきながら、どう自主的な活動に結び付けるかというところが、一番広がりができる世界かと思う。
- 【深野委員】 人材バンクに登録している人たちの、横のネットワークはあるのか。
- 【奥村理事長】 基本的にはそういう場を作っている。研修会のご案内やイベントのつながりという機会はあるが、個人での登録ベースなので、そのつながりが広がっていくという発想は少ない。
- 【深野委員】 講座の参加者はだいたい同窓会を作って、また勉強会をやったり自分たちで講座を開いたりという活動をしている。生徒がそういう活動をしているのだから、講師側も、専門知識をもった人が集まったまさしく人材バンクなので、それをどうやって活かすかということをしかけないといけない。横のネットワークから生まれてくるもの、ないしは講座参加者の同窓会に積極的に関わっていく

ような関係づくり、講師だけではなく参加者も含めたネットワーク作りというのは人材バンクの中での重要な機能として考えていかななくてはならない。年1回でもいいので同窓会をやるなど。

**【奥村理事長】** 齊藤委員から、運営を担う団体の話があった。我々は2年前一般公募で選定をされた団体である。その時のプレゼンテーションで、キャンパスおだわらの事務局の機能の中に、キャンパスおだわらに関わりのある団体を集めて事業の検討をするということを説明した。人材バンク事業、情報発信事業、学習講座事業については、当会のメンバーだけではなく他の団体の方にも参加いただき、事業検討会を進めていくという活動もしている。そういうところも評価していただきたいポイントである。そういう活動も遅ればせながら進めているので、ぜひそこもご確認いただきながらご意見をいただき、前に進めたいという認識である。時代が変わってきているので、今現在の講座の話をする、現状いろいろな講座を打っても参加者が非常に少ない。ニーズに対応してないという見方を一方ではされるが、そういうことではない。現在は講座の多様化が進んでおり、多数の講座がある。なかなか人集めが進まないという側面がある。ただ、見方を変えながらいろいろやっつけていかなければならない、時代とともに変わっていくべき段階にあらうという認識ではある。

**【齊藤委員】** 人材バンクについては、数も増えており、生涯学習推進員の会がかなり努力されていることがわかる。特に面白いと思ったのが、生涯学習フェスティバルの中でキャンパス講師の紹介をしているところである。その反省と感想の中で、キャンパス講師の顔写真に対して立ち止まって見る人が多かったという感想があげられている。キャンパス講師に登録することが、学んだことを活かす成果であるし、講師登録されている人をお互いに紹介し合うというのは有効なことだと思うということが、この感想でも述べられており、非常にユニークだなと思った。二つ目にユニークなことは、登録されている方の職業欄に、「主夫」と書かれていることである。主夫業をやっている方がキャンパス講師にかなりなられている。男性が、学ぶだけではなく講師として活躍する場面が見られることは、いいのではないかと思う。三つ目は、改善点であるが、キャンパス講師の登録が増えても、ただ登録しているだけで活動をしていない幽霊登録というケースもあるのではないかということである。講師に登録されている人自身が自分で講座の宣伝をするのだということを誰かがきちんと伝えなければいけない。人材バンクに登録している人の中には、待ち姿勢でいる方がいるかもしれないが、そういう方に自分たちで講座内容を工夫し、人集めもするのだと促すことで、いろいろな意味で市民の人たちが講師になれるチャンスが広がり、学習成果を活かせるとアピールしたほうがよい。

**【奥村理事長】** まさにそれがテーマになっている。キャンパス講師として登録した以上は活動していただくという恰好でいろいろと手当をしている。最近はいとーヨーカ

堂さんから講師の発表の機会、場所の提供があり、今度の土日もキャンパス講師の発表をさせていただく。15名ほど参加し、PRさせてもらう。次につながるようにということで、このような展開をしている。こんな活動にも結びつけているという実績もでてきている状況である。

**【生涯学習課長】** この項目について、整理をする。齊藤委員から言われたことはプラスの評価と受け止めさせていただいたが、生涯学習フェスティバルでのキャンパス講師の紹介がユニークな形で行われているので、今後もこのような展開をというご意見をいただいた。また、合わせて講師の在り方の問題については、待ちの姿勢ではなく、講師自身によるPR、人集めの必要性をきちんと伝えることというご意見をいただいた。もう一点深野委員から、登録されているかたの交流ネットワークについてご意見としていただいたので、受け止めたいと思う。

**【木村議長】** 最後に、キャンパスおだわらについて一番理解されている齊藤委員に、みなさんの意見について総括をよろしくお願ひしたい。

**【齊藤委員】** 社会教育委員会議では、キャンパスおだわらについて主として取り上げてきたわけではないので、今日初めて評価するという事になったが、みなさん前向きに検討していただけたので、非常にありがたかった。キャンパスおだわら事業が始まってから10年を迎えたが、キャンパスおだわら事務局に新たな担い手の人たちが入ってこないという悩みを抱えたままになっていると思う。その部分は今後おだわら市民学校の受講生を積極的に誘うなど、新たな継承の段階に入っているかもしれないので、そういうことも含めて、みなさんと協力しながら前向きにやりたいと思っている。

**【木村議長】** その他事務局から何かあるか。

(事務局より、地区研究会の最終的なタイムスケジュールは出来次第送付すること、次回会議は例年とおりであれば2月開催予定である旨説明)

**【木村議長】** 次回は11月14日地区研究会になるので、よろしくお願ひする。これで本日の社会教育委員会議を閉会とする。